

海外語学研修指導の実際

野 中 辰 也

Tips for a Homestay Program That Works

Tatsuya Nonaka

1. はじめに

本稿は、野中（2008b）の続編として、短期大学生を対象とした「海外語学研修（短期ホームステイ）」について、その実践の詳細を紹介するものである。野中（2008b）では、筆者勤務先の私立短大で過去10年以上に渡り実施している海外語学研修について、その指導内容を紹介したが、紙数の制限からその一部のみを紹介するにとどまった。本稿では、その内容に加筆することによって、より詳細な実践例の紹介を行いたい。

当該の語学研修は授業科目の一つであり、在学生在が1年次末に3週間に渡ってアメリカでホームステイを行い、平日昼間は現地スタッフのもとで英会話授業や見学に参加、平日夜間および週末は各学生がボランティアのホストファミリー宅に滞在する。研修の充実に向けて、研修前後半年ずつを「事前指導」「事後指導（日本語および英語でのwebレポート作成）」にあてている¹⁾。

ホームステイ形式の短期語学研修は、現在、中学・高校の学校や地区単位で多く実施されているが、旅行代理店主導の高額な異文化体験ツアーで終わっているといった事例も漏れ聞く。本稿では、短期語学研修プログラムを実施・検討中の先生方に、異文化体験から一歩進んで、参加者の英語運用能力向上に結びつき満足度も高い研修の参考となるような実践例を紹介したい。

2. 研修概要

2. 1. 研修の位置付け

本研修は、短大の人間総合学科在学生のうち英語科目を主に履修している学生（履修科目全体のうちの6～7割程度が英語科目）を対象としており、約3週間のホームステイを通しての英語運用能力伸長と異文化理解を目的としている。研修は「海外語学研修」という授業科目として、それぞれ約半年間の事前・事後指導を含んでいる。

2. 2. 研修先・期間・内容

研修先はアメリカ・ワシントン州のシアトル郊外で、研修期間は短大1年次末の20日間。研修参加者は、20日間のうち、平日13日間は現地スタッフのもとで英会話授業（午前中）や見学（午後・終日）を行ない、それ以外の時間帯は個別に1家庭にホームステイをし、さまざまな活動を行なう²⁾。授業科目であるということもあり、日中の授業や見学の際には、参加者同士の際も含めて英語のみで生活するように引率教員からの指導がなされている。そのため、中学校・高等学校ほかでの異文化理解を主目的としたホームステイプログラムと比べて、参加者が積極的に英語を使用する機会は多く、動機付けも高くなっていると考えられる。

2. 3. 研修参加者

研修には例年10名前後の学生が参加している。参加学生は短大で英語科目を中心に履修しているが、研修参加前の英語運用能力はhigher elementaryからlower intermediateのレベルである。研修参加にあたっては、その要件として実用英語技能検定準2級取得を課しており、研修参加以前に参加学生のほぼ全員が準2級資格を取得済みであり、同検定の2級資格を取得済みの学生も若干名いる。さらに、効果測定のために研修開始直前に毎年実施しているTOEIC IPテスト³⁾の結果からは、参加者のTOEIC平均スコアは例年400点に若干届かず、最高点は500点台中盤、最低点は200点台後半といったレベルとされている。

3. 事前指導

研修を有意義なものにするための事前指導は、実際の研修開始の約半年前から始めている。参加学生には、長期間に及ぶ事前指導を通して、現地で充実した日々を送るための英語力はもちろん、忍耐力や知力までも備えることができるように指導が繰り返される。以下、事前指導の内容を指導の時系列に沿って紹介していくこととする。

3. 1. 対話を助けるアイディア1：写真

事前指導の時期に学生が抱える不安に、ホストファミリーと話がはずむか心配というものがある。この不安解消のために、ホストファミリーとの対話に使える写真をできるだけ多く持参させている。

事前指導では、まず、「ホストファミリーとの対話に役立つ写真の題材を50項目考える」という課題を与えている。こうした課題を与えると、最初は「家」「友達」といった大雑把すぎるものや、逆に「父」「母」「姉」といった細かすぎるものをリスト化する学生が多い。そうしたリストを作成する学生には、「家（外観、玄関、居間、台所、浴室、自室）」「友人（大学、高校、中学）」といった具体性や、「家族」「高校の修学旅行先の様子」といった包括性を意識させるほか、「スーパーマーケット」「軽自動車」「郵便ポスト」「バレンタイン商戦」など日米の違いがわかるような項目についてヒントを与え、リストの充実を図らせている。因みにステイ先で、「学生の1週間分の食事を21枚の写真にまとめたのが面白かった」といった具体例をもらったこともある。

次に、こうして完成した個人別の写真リストを参加者全員で共有し、題材についてのアイディアをふくらませたうえで、実際の写真の準備に進ませる。この作業では、夏祭りやクリスマスといった季節物の写真を撮り損なわないように適宜指導するほか、写真を書き込みができるアルバムにまとめさせ、

ちょっとしたコメントを英語で書かせると、ステイ先での説明に役に立つ。

実際に、上記のような準備をすると、100枚超の写真ステイ先に持ち込む学生も少なくなく、ホストファミリーとの会話に役立ったという感想もよく聞かれる。さらに、ステイ先の人々に見せるアルバムに加えて、日本文化などをまとめたアルバム自体をお土産として手渡してくるといったアイディアもある。

3. 2. 対話を助けるアイディア2：FAQ

ステイ先のホストファミリーや見学先では、実にさまざまなことを尋ねられるが、学生が日本や地元についての基本的な質問に答えられないことが非常に多い。こうした問題を解消するために、事前指導では、英問英答対策FAQ集を作成し、その返答を考える課題を与えている。FAQには“Japan,” “Niigata,” “Hometown,” “Our College” の4項目全37問を用意した。

資料1：FAQ（抜粋）

Where is Japan?	How large is Japan?	How many people live in Japan?
How high is Mt. Fuji?	How long does it take to fly from Japan to Seattle?	
What sports are popular in Japan?	Pick out three of them.	Where is Niigata?
How far is it from Tokyo to Niigata City?	How long does it take to go to Tokyo by train?	
How often and how much do you have snow in Niigata City?		
Where is Seiryō College?	How many students are in Seiryō College?	
What do students study at Seiryō?	What do YOU study at Seiryō?	
What kind of classes do you take at college?	How many classes do you have a day?	

このFAQは一部の語彙を除けばいずれも中学校2年程度までの学習内容で解答可能なものである。しかしながら、ほとんどの学生がこうした基本的な疑問文の応答形式自体にまず苦勞するのが毎年のことである。典型的な解答例は、あらゆるWh-疑問文に “It's ...” と返答してしまうパターンで、これを訂正するだけで学生とのメールの交換が数往復に及ぶのがいつものこととなる。訂正指示を受けたFAQの返答を繰り返し見直すことにより、学生は基本的な疑問文の応答パターンに慣れるようになる。

また、この課題では、例えば “Japan is XXX square kilometers/acres.” といった解答をする学生が多いが、お互いに覚えきれない数値や単位を使わずとも、“Japan is a little smaller than the State of California.” といった中学校レベル+ α の表現で返答可能であることを意識させている。同様に、細かい数値表現は抑え、“Mt. Fuji is about 12,400 feet high.” のように “about” を使った表現を意識させてもいる。

さらに、学生が上記の課題をこなした後には、片面にFAQが一問ずつ書かれたカードを使っての一问一答の発話活動も行い、英問英答の内容の定着を図っている。こうした指導により「疑問文を発話できないし、返答できない」という状況の改善に努めている。

3. 3. 対話を助けるアイディア3：ライティング課題+ α

上述のFAQは一问一答形式のものであるが、「日本人のデート (Dating in Japan)」「日本人の結婚 (Marriage in Japan)」「日本の学校 (Education in Japan)」といった特定の話題については、文章レベルで説明ができるようにライティング課題を与えている。

具体的には、上記の話題それぞれについて、事前にA4用紙1枚に収まる英文で例えば「日本人のデート」について説明するライティング課題を提出させる。この提出課題自体は学生に各話題について考えさせるきっかけを与えるもので、提出後の授業では、それぞれの話題について外国人に説明するのに助けになるようなブレイン・ストーミング用の疑問文のリストを与え（資料2）、それを基として特定の話題についての説明とその流れを指導している。こうしたブレイン・ストーミング活動は学生のコミュニケーション能力の養成に欠かせないものとなっており、事前指導の随所で採用している手法である。こうした指導を通して、話題の広げ方、そのために必要とされる言わば「質問力」を養成することは、事前指導の肝となっている。

資料2：Writing Cue Questions（抜粋）

When do they start dating?	How many of middle school students have boyfriends?
Where do girls meet boys?	Neighbors / Classmates / Members of the same club at school?
How do they become a couple?	Is it very common that a girl tells her love to a boy?
How often do they go dating?	Every day / Once a week / Once a month?
Where do they go?	
What do they do?	Going shopping / Going to the movies / Visit each other's home?
Do their parents know about it?	Do they introduce their date to their family?
How long do they go on dating?	How long do you go on dating before you break up / get married?
How long do you think you need dating before you know he's the man?	

3. 4. 対話を助けるアイディア4：物価比較

研修で学生が体験する文化差異のひとつに物価の違いがある。そうした話題についての説明に役に立つように、事前指導の一つとして、「ハンバーガー」から「一戸建て」の価格まで「ホストファミリーとの対話に役立つ40の物品の価格を表にまとめる」という課題を与えている。具体的には、「マクドナルドのビッグ・マック」「アルバイトの時給」「映画チケット代」「大卒初任給」「牛乳1パック」「ガソリン1ℓ」など10項目ほどの例を提示したうえで、それが日本円ではいくらで、米ドルに換算するといくらになるかをエクセル・ファイルにまとめる表を作成させ、さらにいろいろなものの価格を各自で調べるという作業をさせている。

この活動では、相手の興味を引くような項目についての価格調査をすることはもちろん、例えば牛乳パックやガソリンの価格については、相手に理解してもらいやすいように単位をリットルからガロンに換算して説明するといった手順も必要となってくる。こうした準備を通して、相手に理解してもらうために、どのような話題をどのような方法で提示すればいいかを学生に考えさせている。さらに、この作業に併せて、度量衡の違い、具体的には「距離（kmとmile）」「気温（摂氏と華氏）」「重さ（kgとpound）」の換算手順を教え、そうした情報の交換についても不安のないように準備をさせてもいる。

3. 5. 小学校訪問準備

研修では、現地の小学校訪問の機会を設け、5名程度のグループごとに幼稚園児から小学5年生くらいまでの教室を訪れ、「日本語の数の数え方」や「日本語の色の呼び名」「日本語での動物の鳴き方」などを模擬授業形式で教えている。事前指導では、教員が作成した原稿をもとに、絵や小道具を自作してのプレゼン練習を行っている。

資料3：模擬授業原稿（抜粋）

One in English is *ichi* in Japanese. It sounds like "itchy." Now repeat after me. *Ichi*. Good!
 OK. Next, two is *ni* in Japanese. It's just like "knee." Repeat after me. ...
 Three is *san* in Japanese. It's the same as the "sun" in the sky. Repeat after me. ...
 Now can you say from one to three in Japanese?
 One is ...? (Wait for the kids to answer) Yes, one is *ichi*.
 Two is ...? (Wait for the kids to answer) Yes, two is *ni*.
 Three is ...? (Wait for the kids to answer) Yes, three is *san*.
 Now can you say from one to ten one by one?
 Can you say your age in Japanese? How old are you in Japanese?

実際の訪問では、上記の模擬授業に引き続き、子どもたちを相手に日本についての質問に答えたり、子どもたち一人ひとりに片仮名や平仮名で名前を書くことを個別に教えたりもしている。この訪問は、アメリカの子どもたちの積極性もあって、毎年かなり盛上がり、参加学生からも高い評価と満足度を得ており、高校生レベルの参加者でも十分実行可能な活動だと思われる。こうした見学は多くの語学研修に盛り込まれているが、ただ行っただけ・見ただけで時間と費用の無駄とならないように、意味のある活動を盛り込ませるように心がけている。

3. 6. 社会見学準備

研修では、小学校に加えて警察署、消防署、市役所、老人介護施設、現地姉妹校であるコミュニティ・カレッジといった場所に社会見学に行く機会を設けている。このうち、特に警察署、消防署訪問では、現地の警察官や消防士から短い講義を受けたりガイドツアーをしてもらったりしている。そうした場合に、その説明内容を正しく聞き取るのはもちろんだが、こちらからも日本の警察署、消防署との違いを踏まえた質問をすることが意義のある語学研修での社会見学へと結びつく。しかし、一般的な短大生には日米を問わず警察署、消防署に関する知識はほとんどないのが現状である。現地で説明内容を正しく理解することに加え、適切な質問もできるように、事前指導では、短大近辺の警察署、消防署をグループ単位で訪問させ、地元の警察署、消防署についての情報を得たうえで、その結果を訪問先で活用できるようにしている。

具体的な準備の流れとしては、例えば地元の警察署を訪問する際には、訪問先でたずねる質問を「警察組織（地元の警察署・交番・警察官の人数ほか）」「警察官（警察官の採用・職務ほか）」「事故・犯罪（新潟県・新潟市の治安状況ほか）」といった枠組みで事前に30項目ほどグループ作業で考えさせることから始める。質問項目が精選されたところで、実際の警察署訪問を行う。訪問後は、訪問先で得た情報を元に、研修先での訪問に備えて、英語で説明・質問ができるように英文での説明文・質問文の作成作業にあたることとなる。

上記の作業を通して、先にも述べた「質問力」に磨きをかけることを学生には期待している。この活動では、初対面の他人を相手に「意味のある」「流れに沿った」質問を考えるといった、日本語でのコミュニケーション能力をも養成する課題として、準備を含めた社会見学が有意義なものとなるよう指導している。また、研修先での質問を考える際には、ここまで繰り返し述べているように、中学校で学習したレベルの基本的文法事項でかなり多くのことが表現できるといったことも繰り返し強調している。実際、学生が尋ねたいと思うことがらの多くはYes-No疑問文やWh疑問文、動詞haveを使った文、Tell

us about ...といった命令・依頼の文でほとんどが質問可能であり、中学校レベルの英語の定着が十分なコミュニケーション能力養成の大きな部分を占めるというのが、長年の継続指導から得た経験知である。

3. 7. 日本文化プレゼンテーション準備

研修最終日のサヨナラパーティでは、ホストファミリーを前にして、5名程度のグループごとに日本文化に関するプレゼンを行っている。学生は日本文化の特定の話題について3つの三択クイズを盛り込んだ10分程度のクイズショーを作り上げる。事前指導では、トピックの選択に始まり、サンプル原稿を参考に自らの原稿の作成、絵や小道具、聴衆用のハンドアウトの準備を行う。

資料4：プレゼン原稿（抜粋）

Hinamatsuri is a girls' festival on March 3rd. If you have a girl in your family, you celebrate the day hoping for the girl's health and happiness.
Now we have a question for you. We put up something special at home for *Hinamatsuri*.
What do you think we put up at home? You have three choices.
No. 1. A display of special dolls
No. 2. A bamboo tree with good luck charms
No. 3. A set of special dishes
Okay. How many of you think the answer is "No. 1. A display of special dolls?" Please raise your hand. ……

これまでの研修では、「正月」「ひな祭り」「大晦日」「披露宴」「相撲」「小学校」「着物」「名前」「お金」「ジェスチャー」「自動車運転免許」ほか、さまざまな話題についてプレゼンを行い、ホストファミリーからも毎回好評を得ている。

4. 研修中の指導

研修中の指導としては、特に引率者の役割について触れておく。引率者は現地ティーチャーガイドとの協力のもと、参加者の英語運用能力向上を助けるように指導にあたっている。具体的には、引率教員が常時英語を使い、研修目的は英語運用能力の向上にある点を学生に意識させるほか、参加学生にも常時英語使用を働きかけたり、現地スタッフの英語を学生たちがわかりやすい表現に適宜言い換えたり、基本的に学生を英語漬けにしつつほめて励ますことを心がけている。

そのほか、引率者の当然の役割として、事故・病気といったトラブル突発に備える、ティーチャーガイドおよびホストファミリーとの連絡を密にする、といった点にも留意している。結果として、参加学生は長期の事前指導で培った英語力を元に積極的に現地の人々とコミュニケーションを図っており、満足度の高い状態で研修を終えているのが、ここ数年の状況である。

5. 事後指導

研修の事後指導としては、2年次前期を使用して、各学生に研修結果をwebページ形式のレポートに

まとめさせている。特に英語でのwebページ作成では、研修先での体験をまとめることに加え、現地で自分がよく使った・耳にした英語表現をまとめさせることもしており、学生にとっては、研修の振り返りと英語を更に学びたいと言う動機づけを強化する活動になっているようである。なお、英文レポートの作成の際には、特に中学校レベルの初歩的な英語を駆使するだけでかなり多くのことが言える点を強調して指導にあたっており、事前指導から事後指導までを通して、基本的な英語で多くのことが表現できるということがキャッチフレーズ化している。完成したレポートはaccuracyの面では教員の添削を受けてはいるが、そのfluencyの面では研修成果を十分に反映したものとなっている。

6. おわりに

本稿では短期語学研修に役立つと考えられる活動例をいくつか紹介した。長年に渡る実践を通じて言えることは、現地での言語活動を促進するためには、事前準備に力とアイディアを注ぐということに尽きる。さらに、研修引率者自身が現地で積極的に英語を使用し、学生を励まし、現地スタッフと協力して研修の成功を目指すことも、欠かすことのできない要件である。なお、本稿では研修の効果測定結果には触れなかったが、それについては別途稿を改めて記すとして、本稿を締めくくりたい。

注

1) 直近の学生レポートは、下記URLで公開している。

<http://www.n-seiryu.ac.jp/~nonaka/hs10/>

2) 直近の研修概要は、下記URLで公開している。

<http://www.n-seiryu.ac.jp/~nonaka/hs2012/>

3) TOEIC IP (= Test of English as International Communication Institutional Program) はTOEICの企業・学校向け団体受験方式のテストで、内容およびスコアについては通常版のTOEICと同等のものである。なお、本稿では研修の厳密な効果測定を目的としていないため、TOEICスコアの記述についてはおおまかなものに留めてあるが、効果測定の詳細については野中(2008a)を参照されたい。

引用文券

野中辰也. (2005). 「海外語学研修の効果測定」『新潟青陵大学短期大学部研究報告第35号』 pp.7-12.

_____. (2008a). 「海外語学研修の効果測定(2)」『新潟青陵大学短期大学部研究報告第38号』 pp.43-49.

_____. (2008b). 「実践報告：海外語学研修(ホームステイプログラム)の充実に向けて」『英語教育・英語学習研究 現場型リサーチと実践へのアプローチ』 金谷憲教授還暦記念論文集刊行委員会(編) 桐原書店. pp.318-321.